

中学校学習指導要領解説 学習評価Q&A 外国語科



教
学
一
如

教えることは 学ぶことである
学び続ける教職員に



鹿児島県総合教育センター

学習指導要領解説学習評価Q & Aについて

平成29年3月に公示された学習指導要領の趣旨を踏まえた学習評価について、基本的な考え方や小・中学校の教科等別に評価規準の作成のポイントを先生方に分かりやすく解説するためQ & A形式でまとめています。

この学習評価Q & Aは、改訂された学習指導要領に基づき、どんなところが変わったのかをまとめています。

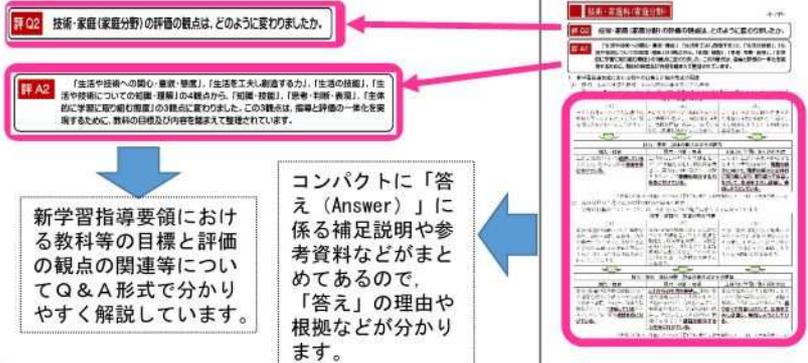


1 大事なポイントを解説

学習指導要領解説を踏まえ、国立教育政策研究所の「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」に基づいて作成しているので、各教科等の学習評価を行う上で大事なポイントが分かります。

2 Q&A

教科の目標や学年の目標に照らし合わせて評価規準の作成の手順等を図式化し、留意点などワンポイントアドバイスを取り入れるなど、分かりやすく読みやすい内容で解説しています。



3 簡単アプローチ

「指導と評価の一体化」を図り、児童生徒の資質・能力の確実な育成に資するために、日々の授業改善や評価の改善に生かしてください。各教科ごとに必要な部分だけでも印刷・ダウンロードできます。

目 次

評Q1	学習評価の基本的な考え方とはどのようなものですか。 ……	1
評Q2	外国語科の評価の観点は、どのように変わりましたか。 ……	4
評Q3	外国語科の評価規準は、どのように作成すればよいですか。 ……	7
評Q4	評価をする際、具体的にどのようなことに気を付ければよいですか。 ……	12

外国語科(共通)

評 Q1 学習評価の基本的な考え方とはどのようなものですか。

評 A1

学習指導要領の目標及び内容が、資質・能力の三つの柱で再整理されたことを踏まえ、各教科の評価の観点も、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に取り組む態度」の3観点到に整理され、それに伴い観点別学習状況の評価の考え方も変わりました。

教師が児童生徒の学習状況を的確に捉え、授業改善を図るとともに、児童生徒が自らの学びを振り返って次の学びに向かうことができるようにするために「学習評価の在り方」が極めて重要です。

1 学習評価の意義

(1) 学習評価の充実

平成 29 年改訂小中学校学習指導要領総則においては、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善と学習の過程や成果を評価する評価の改善を両輪として行っていくことの必要性が明示されました。

(2) カリキュラム・マネジメントの一環としての指導と評価

「学習評価」は「学習指導」とともに、学校の教育活動の根幹であり、教育課程に基づいて組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図る「カリキュラム・マネジメント」の中核的な役割を担っています。

(3) 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善と評価

「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を通して各教科等における資質・能力を確実に育成する上で、学習評価は重要な役割を担っています。

(4) 学習評価の改善の基本的な方向性

(1)～(3)の学習評価の意義を踏まえ、学習指導要領改訂の趣旨を実現するためには、学習評価の在り方が極めて重要です。学習評価を真に意味のあるものとするために指導と評価の一体化を実現することがますます求められています。

【ポイント】

- 児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
- 教師の指導改善につながるものにしていくこと
- これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと



「指導と評価の一体化」を図るためには、児童生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくというPDCAサイクルが大切です。

2 評価の観点の整理

育成を目指す資質・能力の三つの柱に基づいた目標や内容の再整理を踏まえ、観点別学習状況の評価の観点については、小・中学校の各教科等を通じて「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到に整理されました。

[平成 20 年改訂]

関心・意欲・態度

思考・判断・表現

技能

知識・理解

[平成 29 年改訂]

知識・技能

思考・判断・表現

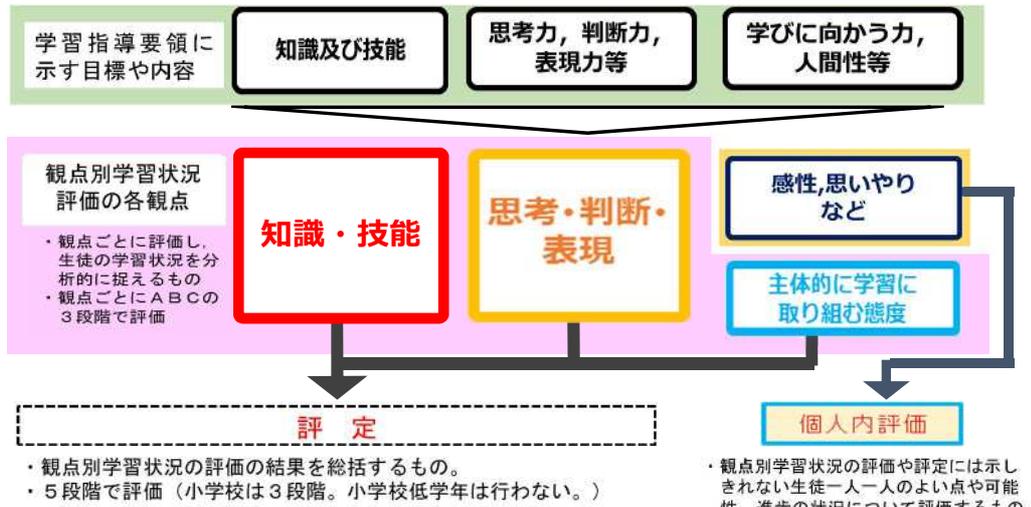
主体的に学習に取り組む態度

【参考】

生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。(学校教育法第 30 条第 2 項)

3 各教科における評価の基本構造

2で示した評価の観点の整理も踏まえて各教科における評価の基本構造が以下のように示されています。



（『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」p.8を基に作成、以下「学習評価参考資料」と記す。）

4 各教科における観点別学習状況の評価の考え方



上記の「各教科における評価の基本構造」を踏まえた3観点の評価それぞれについての考え方は次のとおりです。なお、この考え方は、外国語活動(小学校)、総合的な学習(探究)の時間、特別活動においても同様です。

「知識・技能」

各教科等の学習の過程を通じた知識及び技能の習得状況について評価します。それらを既有的な知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、概念等として理解したり、技能を習得したりしているかについて評価します。

「思考・判断・表現」

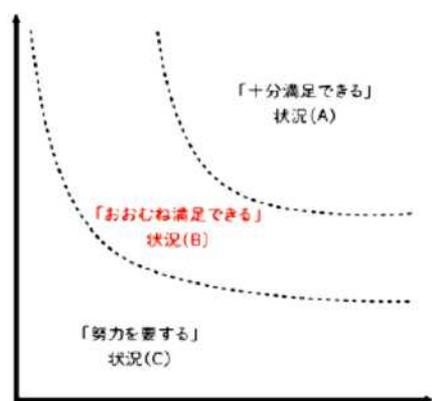
各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうかを評価します。

「主体的に学習に取り組む態度」

「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、「①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面」と、「②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面」という二つの側面から評価することが求められます。

これら①②の姿は実際の教科等の学びの中では別々ではなく相互に関わり合いながら立ち現れるものと考えられます。例えば、自らの学習を全く調整しようとしせず粘り強く取り組み続ける姿や、粘り強さが全くない中で自らの学習を調整する姿は一般的ではありません。

②自らの学習を調整しようとする側面



①粘り強い取組を行おうとする側面

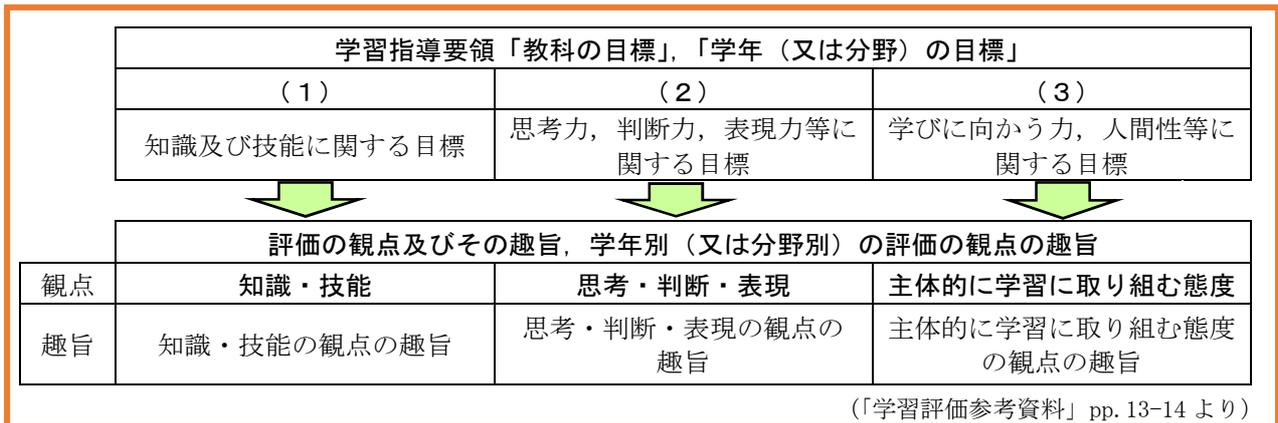
（「学習評価参考資料」p.10を基に作成）

5 各教科における評価規準の作成について

(1) 目標と観点の趣旨との対応関係について

評価規準の作成に当たっては、各学校の実態に応じて目標に準拠した評価を行うために、「評価の観点及びその趣旨」が各教科等の目標を踏まえて作成されていること、また同様に、「学年別（又は分野別）の評価の観点の趣旨」が学年（又は分野）の目標を踏まえて作成されていることを確認する必要があります。

なお、「主体的に学習に取り組む態度」の観点は、教科等及び学年（又は分野）の目標の（3）に対応するものですが、観点別学習状況の評価を通じて見取ることができる部分をその内容として整理し、示していることを確認することが必要です。（詳細は、評Q2参照）



指導と評価の計画を作成し、評価規準に基づいた「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点の観点別評価を実施することで、児童生徒の姿が、教科の目標や学年の目標に近付いていくことになります。

(2) 「内容のまとめりごとの評価規準」とは



「内容のまとめり」とは、学習指導要領に示す各教科等の「第2 各学年の目標及び内容」の「2 内容」の項目等をそのまとめりごとに細分化したり整理したりしたものです。基本的には、学習指導要領に示す各教科等の「第2 各学年（又は分野）の目標及び内容」の「2 内容」において、「内容のまとめり」ごとに育成を目指す資質・能力が示されています。このため、「2 内容」の記載はそのまま学習指導の目標となり得るものとなっています。（詳細は、評Q2参照）

(3) 「内容のまとめりごとの評価規準」を作成する際の基本的な手順

各教科における、「内容のまとめりごとの評価規準」を作成する際の基本的な手順は以下のとおりです。

学習指導要領に示された教科及び学年（又は分野）の目標を踏まえて、「評価の観点及びその趣旨」が作成されていることを理解した上で、

- ① 各教科における「内容のまとめり」と「評価の観点」との関係を確認する。
- ② 【観点ごとのポイント】を踏まえ、「内容のまとめりごとの評価規準」を作成する。

評 Q2 外国語科の評価の観点とは、どのように変わりましたか。

評 A2 「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」、「言語や文化についての知識・理解」の4観点から、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に変わりました。この3観点は、指導と評価の一体化を実現するために、教科の目標及び内容を踏まえて整理されています。

1 新学習指導要領における教科の目標と評価の観点の関連

(1) 外国語科の目標と評価の観点及びその趣旨

教科の目標の(1)～(3)と、それぞれ評価の観点及びその趣旨が合うようになっています。

外国語科の目標		
(1)	(2)	(3)
外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。



外国語科 評価の観点及びその趣旨		
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> 外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを<u>理解している。</u> 外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を<u>身に付けている。</u> 	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して <u>表現したり伝え合ったりしている。</u>	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを <u>図ろうとしている。</u>

(文部科学省「各教科等・各学年等の評価の観点等及びその趣旨」より 下線、太字は筆者による)

(2) 外国語科の領域別目標及び内容のまとめ(五つの領域)ごとの評価規準例

五つの領域別の目標の記述は、資質・能力の三つの柱を総合的に育成する観点から、各々を三つの柱に分けずに一文ずつの能力記述文で示しており、それらの目標がそれぞれの評価の観点に合うようになっています。



「内容のまとめ」と「評価の観点」との関連について補足します。

中学校外国語科における「内容のまとめ」は、中学校学習指導要領第2章第9節外国語 第2各言語の目標及び内容等 英語 1 目標に示されている「五つの領域」のことです。

そのため、外国語では、この内容のまとめ(五つの領域)ごと、さらに観点別で評価規準を作成する必要があります。

〈英語の目標〉

- 聞くこと
 - ア はっきりと話されれば、日常的な話題について、必要な情報を聞き取ることができるようにする。
 - イ はっきりと話されれば、日常的な話題について、話の概要を捉えることができるようにする。
 - ウ はっきりと話されれば、社会的な話題について、短い説明の要点を捉えることができるようにする。
- 読むこと
 - ア 日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取ることができるようにする。
 - イ 日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の概要を捉えることができるようにする。
 - ウ 社会的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の要点を捉えることができるようにする。
- 話すこと [やり取り]
 - ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。
 - イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする。
 - ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて述べ合うことができるようにする。
- 話すこと [発表]
 - ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。
 - イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする。
 - ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて話すことができるようにする。
- 書くこと
 - ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて正確に書くことができるようにする。
 - イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができるようにする。
 - ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて書くことができるようにする。



〈評価規準の例〉

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
聞くこと	[知識] 英語の特徴やきまりに関する事項を理解している。 [技能] 実際のコミュニケーションにおいて、日常的な話題や社会的な話題について、はっきりと話された文章等を聞いて、その内容を捉える技能を身に付けている。	コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題についてはっきりと話される文章を聞いて、必要な情報や概要、要点を捉えている。	外国語の背景にある文化に対する理解を深め、話し手に配慮しながら、主体的に英語で話されることを聞こうとしている。

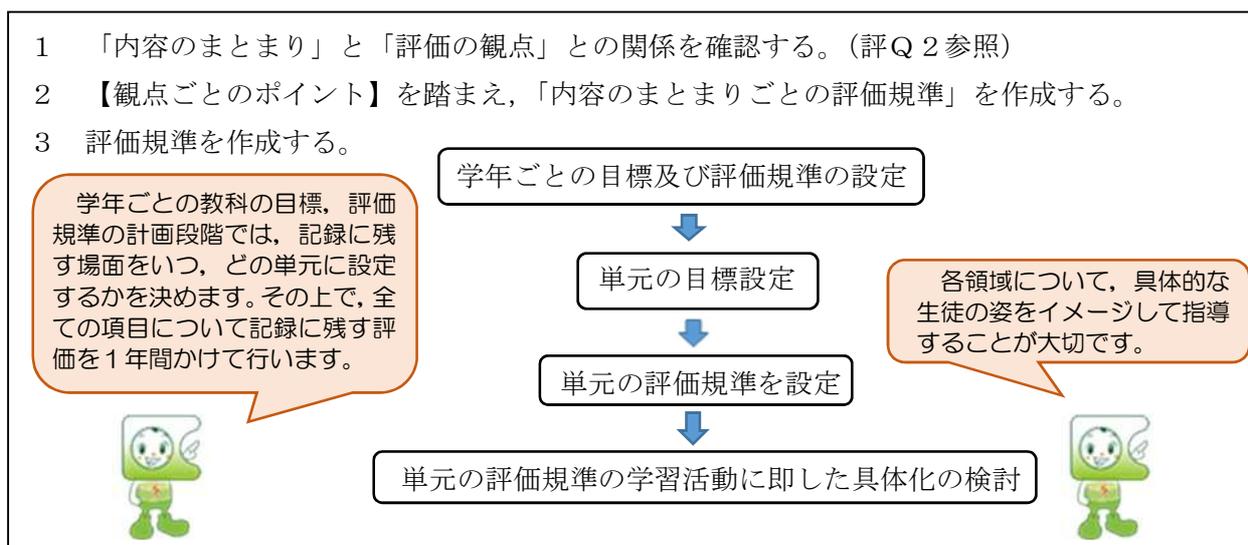
読むこと	<p>[知識] 英語の特徴やきまりに関する事項を理解している。</p> <p>[技能] 実際のコミュニケーションにおいて、日常的な話題や社会的な話題について書かれた短い文章等を読んで、その内容を捉える技能を身に付けている。</p>	<p>コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について書かれた短い文章を読んで、必要な情報や概要、要点を捉えている。</p>	<p>外国語の背景にある文化に対する理解を深め、書き手に配慮しながら、主体的に英語で書かれたことを読もうとしている。</p>
話すこと「やり取り」	<p>[知識] 英語の特徴やきまりに関する事項を理解している。</p> <p>[技能] 実際のコミュニケーションにおいて、日常的な話題や社会的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて伝え合う技能を身に付けている。</p>	<p>コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて、伝え合っている。</p>	<p>外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、話し手に配慮しながら、主体的に英語を用いて伝え合おうとしている。</p>
話すこと「発表」	<p>[知識] 英語の特徴やきまりに関する事項を理解している。</p> <p>[技能] 実際のコミュニケーションにおいて、日常的な話題や社会的な話題などについて、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて話す技能を身に付けている。</p>	<p>コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて、話している。</p>	<p>外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手に配慮しながら、主体的に英語を用いて話そうとしている。</p>
書くこと	<p>[知識] 英語の特徴やきまりに関する事項を理解している。</p> <p>[技能] 実際のコミュニケーションにおいて、日常的な話題や社会的な話題などについて、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて、またはそれらを正確に用いて書く技能を身に付けている。</p>	<p>コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題などについて、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて、書いている。</p>	<p>外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に英語を用いて書こうとしている。</p>

評 Q3 外国語科の評価規準はどのように作成すればよいですか。

評 A3 まず、「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方を踏まえ、「領域別の目標」及び「五つの領域ごとの評価規準」を各学校において作成します。さらに、「領域ごとの評価規準」を学習活動に即して具体化します。

1 評価規準作成の流れ

- 1 「内容のまとまり」と「評価の観点」との関係を確認する。(評 Q 2 参照)
- 2 【観点ごとのポイント】を踏まえ、「内容のまとまりごとの評価規準」を作成する。
- 3 評価規準を作成する。



2 「学年ごとの目標」及び「学年ごとの評価規準」の設定

- 「外国語科の目標」及び「五つの領域別の目標」に基づき、各学校における生徒の発達の段階と実情を踏まえ、「学年ごとの目標」「五つの領域別の『学年ごとの目標』」を適切に定める。



学年の目標は、生徒の実態や教材の題材を踏まえて設定しますが、学年によって大きく変わるものではありません。

- 五つの領域別の「学年ごとの目標」は、「五つの領域別の目標」を踏まえると、各々を資質・能力の三つの柱に分けずに、一文ずつの能力記述文で示すことが基本的な形となる。(評 Q 2 〈英語の目標〉参照)
- 五つの領域別の「学年ごとの目標」に対応する「学年ごとの評価規準」は、「内容のまとまり(五つの領域)ごとの評価規準」を踏まえて、3観点で記述する必要がある(評 Q 2 〈評価規準の例〉を参照)。五つの領域別の「学年ごとの目標」から「学年ごとの評価規準」を作成する手順は、「内容のまとまり(五つの領域)ごとの評価規準」の場合と基本的に同じである。

3 「単元ごとの目標」及び「単元ごとの評価規準」の設定

- 「単元ごとの目標」は、五つの領域別の「学年ごとの目標」を踏まえて設定する。
- 「単元ごとの評価規準」は、「内容のまとめり（五つの領域）ごとの評価規準」「学年ごとの評価規準」と同様に、「単元ごとの目標」を踏まえて設定する。
- 「単元ごとの目標」及び「単元ごとの評価規準」は、言語材料や当該単元の中心となる言語活動において設定するコミュニケーションを行う目的や場面、状況、取り扱う話題などに即して設定する。

(例) 友達の意見等を踏まえた自分の考えや感想等をまとめるために、社会的な話題（ユニバーサルデザイン）について書かれた文章を読み、読んだことを基に考えたことや感じたこと、その理由などについて話したり書いたりして伝え合うことができる。



「単元の目標」や「1 単位時間の目標」は、一文ずつ能力記述文で示すことを基本的な形として、重点的に指導を行う領域が分かるように記述します。

上記の例では、本単元を通して、「話すこと（やり取り）」、「書くこと」の指導を行う例を示しています。

- 単元の目標が設定されたら、「内容のまとめり（五つの領域）ごとの評価規準（例）」（評Q 2）を基に、評価規準を作成します。



単元の目標が決まったら、以下の例のように**重点的に**指導を行う領域ごとの評価規準を設定します。

(例) 指導の重点

「話すこと（やりとり）」、「書くこと」

【知識・技能】	【思考・判断・表現】	【主体的に学習に取り組む態度】
<p>[知識] that, if, when because, that などの接続詞を含む文構造について、その特徴や決まりを理解している。</p> <p>[技能] 学校や町のバリアフリー化について考えたことや感じたこと、その理由などを that, if, when, because 等の接続詞を含む文構造を用いて話したり書いたりして伝え合う技能を身につけている。</p>	<p>友達の意見等を踏まえた自分の考えや感想などをまとめるために、ユニバーサルデザインについて書かれた文章を読み、その内容について考えたことや感じたことに理由を加えながら話したり書いたりして伝え合っている。</p>	<p>友達の意見等を踏まえた自分の考えや感想などをまとめるために、ユニバーサルデザインについて書かれた文章を読み、その理由について考えたことや感じたことに理由を加えながら話したり書いたりして伝え合おうとしている。</p>

4 評価規準作成のポイント 「話すこと〔やり取り〕」の場合

(1) 「知識・技能」の評価規準について

〈知識〉

- ・ 「【言語材料】について理解している。」が基本的な形となる。
- ・ 【言語材料】には、当該単元で扱う言語材料が入る。
- ・ 言語材料の種類に応じて、適宜「○○を用いた文の構造を」や「○○の意味や働きを」などの形で当てはめることも考えられる。

〈技能〉

(ア)

- ・ 「【事柄・話題】について、【言語材料】などを用いて、【内容】を即興で伝え合う技能を身に付けている。」が基本的な形となる。
- ・ 【事柄・話題】には、当該単元の中心となる言語活動で扱う事項や話題等が入る。
- ・ 【内容】には、当該単元の言語活動で伝え合う、【事柄・話題】に関する事実や自分の考え、気持ちなどが入る。

(イ)

- ・ 「【事柄・話題】について、【内容】を整理し、【言語材料】などを用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりする技能を身に付けている。」が基本的な形となる。
- ・ 【事柄・話題】には、当該単元の言語活動で扱う、身近な話題等が入る。

(ウ)

- ・ 「【事柄・話題】について聞いたり読んだりしたことについて、【内容】を、【言語材料】などを用いて述べ合っている。」が基本的な形となる。
- ・ 【事柄・話題】には、当該単元の言語活動で扱う、社会的な話題等が入る。

※〈技能〉の(ア) (イ) (ウ)のいずれについても、指導する単元で扱う言語材料が提示された状況で、それを使って事実や自分の考え、気持ちなどを話したり書いたりすることができる状況の評価するのではなく、使用する言語材料の提示がない状況において、既習の言語材料を用いて事実や自分の考えなどを話したり書いたりすることができる技能を身に付けている状況の評価することに留意する。

「知識・技能」では、外国語の知識を理解して、実際のコミュニケーションで活用できる技能を身に付けているかを評価します。

※「技能」については実際のコミュニケーションにおいて、日常的な話題や社会的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて表現したり伝えあったりする技能を身に付けている状況の評価します。

なお、指導する単元で扱う言語材料が提示された状況で、それを使って事実や自分の考え、気持ちなどを話すことができるか否かを評価するのではなく、使用する言語材料の提示がない状況においても、それらを用いて事実や自分の考えなどを話すことができる技能を身に付けているか否かについてを評価します。

(2) 「思考・判断・表現」の評価規準について

(ア)

- ・ 「【目的等】に応じて，【事柄・話題】について，簡単な語句や文を用いて，【内容】を即興で伝え合っている。」が基本的な形となる。
- ・ 【目的等】には，当該単元の中心となる言語活動の中で設定するコミュニケーションを行う目的や場面，状況など（以下「目的等」という。）を，「〇〇に応じて」「〇〇するよう」などの形で当てはめる。その際，学習指導要領の「言語の使用場面の例」や「言語の働きの例」を踏まえて設定する。（イ）（ウ）も同じ。

(イ)

- ・ 「【目的等】に応じて，【事柄・話題】について，【内容】を整理し，簡単な語句や文を用いて伝えたり，相手からの質問に答えたりしている。」が基本的な形となる。

(ウ)

- ・ 「【目的等】に応じて，【事柄・話題】について聞いたり読んだりして，【内容】を，簡単な語句や文を用いて述べ合っている。」が基本的な形となる。

「思考・判断・表現」では，コミュニケーションの目的，場面，状況等に応じて，身近な事柄，自分や相手の事柄，日常的な話題や社会的な話題について表現しているかを評価します。

(3) 「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準の作成の仕方について

(ア)

- ・ 「【目的等】に応じて，【事柄・話題】について，簡単な語句や文を用いて即興で伝え合おうとしている。」が基本的な形となる。

(イ)

- ・ 「【目的等】に応じて，【事柄・話題】について，【内容】を整理し，簡単な語句や文を用いて伝えたり，相手からの質問に答えたりしようとしている。」が基本的な形となる。

(ウ)

- ・ 「【目的等】に応じて，【事柄・話題】について聞いたり読んだりして，【内容】を，簡単な語句や文を用いて述べ合おうとしている。」が基本的な形となる。

※ 言語活動への取組に関して見通しを立てたり振り返ったりして自らの学習を自覚的に捉えている様子については，特定の領域・単元だけでなく，年間を通じて把握する。

「主体的に学習に取り組む態度」では，外国語の背景にある文化に対する理解を深め，他者に配慮しながら主体的に英語を用いてコミュニケーションを図ろうとしているかを評価します。また，思考・判断・表現と同じ場面で一体的に評価をします。

(4) 単元の目標及び評価規準の設定（例）

ア 単元の目標

新しくやってきたALTのことを理解したり，自分のことや自分の住む町のよさを知ってもらったりするために，自分や相手のことについて，簡単な語句や基本的な表現を用いて，考えや気持ちを伝え合うことができる。

イ 評価規準の設定

知識・技能 〈知識〉 〈技能〉	<知識> 助動詞canや疑問詞when を用いた文の構造を理解している。 言語材料 <技能> 町や地域について，事実や自分の考え，気持ちなどを整理し，助動詞canや疑問詞whenなどの簡単な語句や文を用いて伝えたり，相手からの質問に答えたりする技能を身に付けている。
思考・判断・表現	外国の人に「行ってみたい」と思ってもらえるように，町や地域のことについて，目的等 話題 事実や自分の考え，気持ちなどを整理し，簡単な語句や文を用いて伝えたり，相手からの質問に答えたりしている。
主体的に学習に取り組む態度	外国の人に「行ってみたい」と思ってもらえるように，町や地域のことについて，目的等 話題 事実や自分の考え，気持ちなどを整理し，簡単な語句や文を用いて伝えたり，相手からの質問に答えたりしようとしている。

〈作成のポイント〉

- 計画段階では，記録に残す評価（通知表や指導要録に記録する総合的な評価）をいつ，どの単元に設定するか見通しを立てます。その上で，各項目について記録に残す評価を年間を通して行います。
- 記録に残す評価を行う場面を精選するためには，単元のどの場面で，どの内容について，どのような方法で評価を行うか考えておくことが必要です。
- 記録に残す評価は，形成的な評価を行いながら必要な指導を繰り返すなど十分な指導を行ってから行います。
- 指導する単元で扱う言語材料の提示がない状況で，それらを用いて自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる技能を身に付けている状況の評価することに留意します。
- 早い段階で目標を達成している生徒についてはその時点で評価を行います。
- 言語活動への取組に関して見通しを立てたり振り返ったりして，自らの学習を自覚的に捉えている状況については，特定の領域・単元だけではなく年間を通じて評価するようにしてください。



指導と評価の一体化に向けて（指導と評価の計画）

学習評価は，生徒にとっては学習改善の，教師にとっては指導改善のために行うものです。指導に当たっては，全ての生徒が「b以上」の評価を得ることができるよう，学習評価に先立って十分な指導を行うことが大切です。指導と評価の計画を立て，どの学習場面でどの評価規準をどのような方法で評価するのかを明確にし，指導と評価の一体化を図る必要がある。事例を参考に，各学校で指導と評価の一体化に向けて取り組んでみましょう。

【事例】

学習評価に関する事例

「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料
 第3編 第2章 学習評価に関する事例について

【国立教育政策研究所教育課程研究センター】



外国語科(共通)

評Q4 評価をする際、具体的にどのようなことに気を付ければよいですか。

評A4 学習評価については、これまで様々な課題が指摘されてきました。その改善のために、指導と評価の計画を作成し、観点別学習状況評価を計画的に進める必要があります。
また、観点別学習状況評価を総括する際や、総括した評価を評定に総括する際には、校内で十分に共通理解を図り、児童生徒や保護者にも説明できるようにする必要があります。

1 学習評価の進め方について

(1) 学習評価について指摘されてきた課題

学習評価については、以下のような課題が指摘されてきました。



- ・ 評価の結果が児童生徒の具体的な学習改善につながっていない。
- ・ 現行の「関心・意欲・態度」の観点について、挙手の回数や毎時間ノートを取っているかなど、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価であるとの誤解がある。
- ・ 評価の方針が教師によって異なり、学習改善につなげにくい。
- ・ 教師が評価のための「記録」に労力を割かれて、指導に注力できない。

教師は、上記のような課題に応えるためにも、児童生徒への学習状況のフィードバックや授業改善に生かすという評価の機能を一層充実させる必要があります。そのためにも、学習評価の進め方に留意し、評価の充実を図ることが必要です。

(2) 評価の進め方及び留意点

単元（題材）における観点別学習状況の評価の進め方及び留意点は、以下のとおりです。

ア 単元（題材）の目標を作成する。 →評Q3に関連

- 学習指導要領の目標や内容、学習指導要領解説等を踏まえて作成する。
- 児童生徒の実態、前単元までの学習状況等を踏まえて作成する。

イ 単元（題材）の評価規準を作成する。 →評Q3に関連

※ 単元（題材）の目標及び評価規準の関係性については評Q1参照。

ウ 「指導と評価の計画」を作成する。

- ア、イを踏まえ、評価場面や評価方法等を計画する。
- どのような評価資料（児童生徒の反応やノート、ワークシート、作品等）を基に、「おおむね満足できる」状況（B）と評価するかを考えたり、「努力を要する」状況（C）への手立て等を考えたりする。

エ 授業を行い、観点別学習状況の評価を行う。

「指導と評価の計画」に沿って観点別学習状況の評価を行い、児童生徒の学習改善や教師の指導改善につなげる。

オ 観点ごとに総括する。

集めた評価資料やそれに基づく評価結果などから、観点ごとの総括的評価（A, B, C）を行う。

2 「指導と評価の計画」の作成例

これまでの指導計画に、観点別学習状況評価を位置付けた「指導と評価の計画」を作成することで、単元（題材）を見通した計画的な指導と評価を行うことができ、その充実にもつなげることができます。「指導と評価の計画」は、教科等の特性を踏まえ、様々な様式で作成することができます。

【パターン1】（中学校数学科 単元名「一次関数（全17時間）」）

時間	ねらい・学習活動	重点	記録	備考
1	・具体的な事象を捉え考察することを通して、問題の解決に必要な二つの変数を取り出し、それらの関係を表や座標平面上に表すことができるようにするとともに、一次関数の定義を理解できるようにする。	知	知①	知①：行動観察
2	・いろいろな事象で二つの変数の関係を $y=ax+b$ で表すことを通して、事象の中には一次関数として捉えられるものがあることを理解できるようにする。 ・小単元1の学習を振り返って、「学びの足跡」シートに分かったことや疑問などを記述することを通して、その後の学習を見通すことができるようにする。	知 態	知② 態①③	知②：小テスト ※小テストの結果は指導等に生かす。 態①③：「学びの足跡」シート ※小単元2以降の指導等に生かす。

【「知識・技能」の評価の方法】
児童生徒が文章による説明をしたり、各教科等の内容の特質に応じて観察・実験をしたり、式やグラフで表現したりするなどの実際に知識や技能を用いる場面を設けるなど、多様な方法を適切に取り入れていくことが大切です。
例えばペーパーテストにおいて知識の習得を問う問題と、知識の理解を問う問題とのバランスの配慮をする、求められる知識・技能を可視化するような学習カードを作成するなどの工夫改善が考えられます。

【パターン2】（中学校技術・家庭科 題材名「家族・家庭や地域との関わり（全6時間）」）

小 題 材	時間	ねらい・学習活動	評価規準・評価方法		
			知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
家族や地域の人々との関わり	1	○家庭生活は地域との相互の関わりで成り立っていることが分かり、家族や地域の人々と協力・協働し、よりよい家庭生活に向けて問題を見だし、課題を設定することができる。 ・自分と家族や地域の人々との関わりを図等に表す。 ・自治会長など地域の人による講話等を通して、家庭生活と地域との関わりについて話し合う。 ・家族や地域の人々との関わりについて問題点を挙げ、課題を設定する。 (問題点の例) ・家族は防災グッズを用意しているが、実際に何が準備されているのかがよく分かっていない。 ・地域は防災訓練を実施し、災害に備えているが、参加していない。高齢者など地域の人々に任せきりになっている。	①家庭生活は地域との相互の関わりで成り立っていることについて理解している。 ・学習カード	①家族や地域の人々との関わりについて問題を見だし、課題を設定している。 指導に生かす評価 ・学習カード	
		家族や地域の人々と、どのように関わるとよいのだろうか			

【「思考・判断・表現」の評価の方法】
児童生徒の発言内容から、問題を見だし、課題を設定できているかを見取る必要があります。
その際には、例えばペーパーテストのみならず、学習カードやワークシートを活用した論述やレポートの作成、発表、グループや学級における話し合い作品の制作や表現等の多様な活動を取り入れたり、それらを集めたポートフォリオを活用したりするなど評価方法を工夫することが考えられます。

【パターン3】（中学校国語科 単元名「枕草子（全3時間）」）

時	主たる学習活動	評価する内容	評価方法
1	○『枕草子』について、小学校での学習を想起するとともに、映像資料を視聴するなどして概要を理解する。 ○ 第一段を読み、清少納言のものの見方や考え方を知る。	[知識・技能] ①	ノート
2	○ 「うつくしきもの」を読み、清少納言のものの見方や考え方を捉え、自分のものの見方や考え方と比べる。	[思考・判断・表現] ①	ノート
3		[主体的に学習に取り組む態度] ①	振り返りシート

【「主体的に学習に取り組む態度」の評価の方法】
具体的な評価方法としては、ノートやレポート等における記述、授業中の発言、教師による行動観察や児童生徒による自己評価や相互評価等の状況を教師が評価を行う際に考慮する材料の一つとして用いることなどが考えられます。
その際、各教科等の特質に応じて児童生徒の発達の段階や一人一人の個性を十分に考慮しながら、その他の観点（「知識・技能」「思考・判断・表現」）の状況や、前時までの学習を踏まえた上で評価を行う必要があります。



上記のパターンのように、指導と評価の計画は各教科によって、様々な作成の方法がありますので、各学校の実情や児童生徒の状況に応じて作成し、評価の充実を図ってください。

（学習評価参考資料中学校数学 p. 42, 中学校技術・家庭科 p. 107, 中学校国語 p. 66 から一部抜粋）

3 観点別学習状況の総括について

評価に係る記録の総括と評定への総括については、次のことに留意することが大切です。

- ・ 各学校で、総括の考え方や方法等の協議をして、共通理解を図っておく。
- ・ 様々な評価方法の例を参考にしながら、各学校の実態に応じて、各学校で方法等を決定する。

適切な評価の計画の下に得た、児童生徒の観点別学習状況の評価に係る記録の総括の時期としては、**単元（題材）末、学期末、学年末等**の節目が考えられます。



「学習評価参考資料」には、次のように、総括の方法が例示されていますので、各学校における、観点別評価の総括について、評価方法を検討する際の、参考にしてください。

【例1】単元（題材）における観点別評価の総括の例

評価結果のA, B, Cの数を基に総括する場合

学習活動	1	2	3	4	5	6	7	8	単元の評価
知識・技能	A			A	B		B		A or B
思考・判断・表現			B			A		C	B
主体的に学習に取り組む態度		B		B		A		B	B

「AABB」のように同数の場合など、総括に迷う場合があるので、あらかじめ総括の仕方を決めておくことが必要ですね。



【例2】単元（題材）における観点別評価の総括の例

評価結果のAを3点, Bを2点, Cを1点にするなど、数値に置き換えて総括する場合

学習活動	1	2	3	4	5	6	7	8	総括	単元の評価
知識・技能	3点			3点	2点		3点	3点	14/15点	A
思考・判断・表現			3点			2点		2点	7/9点	B
主体的に学習に取り組む態度		2点		2点		3点		1点	8/12点	B

※ 例えば、総括の結果をBとする範囲を $[2.5 \geq \text{平均値} \geq 1.5]$ とすると、「思考・判断・表現」の平均値は、約 2.3 $[(3 + 2 + 2) \div 3]$ で総括の結果はBとなる。

（「学習評価参考資料」p. 16 - 17 を基に作成）

なお、評価の各節目のうち特定の時点に重きを置いて評価を行う場合など、【例1】、【例2】のような平均値による方法以外にも様々な総括の方法が考えられます。

4 観点別学習状況の評価から評定への総括

観点別学習状況の評価から評定への総括は、各観点の評価結果をA, B, Cの組合せ、又は、A, B, Cを数値で表したものに基づいて総括し、その結果を小学校では3段階、中学校では5段階で表します。

中 学 校	5 : 「十分満足できるもののうち、特に程度が高い」状況と判断できるもの
	4 : 「十分満足できる」状況と判断されるもの
	3 : 「おおむね満足できる」状況と判断されるもの
	2 : 「努力を要する」状況と判断されるもの
	1 : 「一層努力を要する」状況と判断されるもの

【例 1】観点別学習状況の評価を数値化し、合計値で評定を決める方法

観点別評価	合計値	評定（小学校）	評定（中学校）
AAA	9	3	5 又は 4
AAB	8		
ABB AAC	7	2	3
ABC BBB	6		
BBC ACC	5		
BCC	4	1	2 又は 1
CCC	3		

A	B	C
3点	2点	1点

「評定」と「総括」においても、学校全体で共通理解して進めていくことが大切です。



【例 2】観点別学習状況の各観点の評価結果を点数で算出し、評定を割合で算出する方法

観点別の達成度	8割以上	5割から8割	5割以下
小学校	3	2	1
中学校	5 又は 4	3	2 又は 1



評価に関する仕組みや評価結果については、保護者の理解を得ることが大切です。児童生徒や保護者に通知表等や保護者会で、丁寧に説明しましょう。説明をして理解を図ることが学習の改善や保護者からの信頼につながります。

5 学習評価の工夫について（チェックポイント例）

(1) 学習評価の妥当性、信頼性を高める工夫について

- 評価について、学校として組織的かつ計画的に取り組んでいる。
- 評価基準や評価方法について、教師同士で検討するなどして明確にしている。
- 評価に関する実践事例を蓄積した上で共有し、評価結果についての検討を通じて力量向上を図っている。
- 児童生徒や保護者に対し、評価に関する仕組みについて事前に説明したり、評価結果について丁寧に説明したりするなど、評価に関する情報を積極的に提供し、児童生徒や保護者の理解を図っている。

(2) 評価時期の工夫について

- 日々の授業で、児童生徒の学習状況を把握して指導に生かすことに重点を置いている。
- 各教科における「知識・技能」及び「思考・判断・表現」の評価の記録については、原則として単元や題材などのまとまりごとに、それぞれの実現状況が把握できる段階で評価している。
- 「主体的に学習に取り組む態度」については、粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとしているか意思的な側面を評価している。
- 学習指導要領に定められた各教科等の目標や内容の特質に照らして、複数の単元や題材などにわたって長期的な視点で評価している。

(3) 学年や学校間の円滑な接続を図る工夫の例

- 「キャリア・パスポート」を活用し、児童生徒の学びをつなげられるようにしている。
- 小学校段階においては、幼児期の教育との接続を意識した「スタート・カリキュラム」を一層充実させている。
- 高等学校段階においては、入学者選抜の方針や選抜方法の組合せ、調査書の利用方法、学力検査の内容等について見直しを図っている。



自校の学習評価の工夫について、チェックポイントを活用して振り返ってみましょう。